

報告 6

地域での性的マイノリティの可視化の取り組み —LGBT人権研究グループKeiwa-signの 「しばたサマーフェスティバル2019」への参加報告—

虎 岩 朋 加

はじめに

LGBT人権研究グループKeiwa-sign（以下、Keiwa-sign）は、敬和学園大学に2015年に学生と教職員の有志によって発足した。その目的は、大学キャンパスをLGBT当事者にとって過ごしやすい環境にするということである。これまでLGBTに関する教職員意識調査、学生意識調査、公開研修会などの実施、新発田市主催人権フェスティバルや学園祭（敬和祭）、チャペル・アッセンブリー・アワーでの啓発活動を行ってきた¹⁾。

Keiwa-signは敬和学園大学の一団体として2019年7月27日に行われた「しばたサマーフェスティバル2019」（以下、サマーフェスティバル）へ参加した。参加の内容は、ネイル体験のブース出店とドラッグ・クィーンの練り歩きである。本報告では、Keiwa-signのこれまでの活動、サマーフェスティバルの企画が誕生した背景、企画の内容、サマーフェスティバル当日の様子を説明し、若干の考察を加える。

1 LGBT人権研究グループKeiwa-signのこれまでの活動

キャンパス内にはさまざまなジェンダーやセクシュアリティの人々がいる。また、伝統的な性別カテゴリーとそれに付随して求められる異性愛主義的考え方やあり方に縛られない、または縛られたくない人々もいる。他方で、キャンパス内の施設、制度、大多数の人々の意識や言動は、伝統的な性別カテゴリーに基づくものである。その結果、伝統的な性別カテゴリーや異性愛主義とは異なる考え方やあり方で生きる人々にとって、キャンパスは困難な場所ともなる。こうした困難を少しでも解消しようと、Keiwa-signは活動してきた。

Keiwa-signの通常の活動は、グループメンバーによる勉強会である。2019年度は、勉強会を「茶話会」と称して、参加者が交代で話題を持ち寄り意見交換を行った。伝統的な性別カテゴリーや異性愛主義とは異なる考え方やあり方で生きていたり、そうした考え方に違和感を覚えるメンバーたちが、生活する中で気になった話題、体験したこと、新しく学んだことなどを、他の参加者に共有する。その中で、新しい気づきや学びを得ることもある。話題は、性差別やマイノリティ差別を生み出す社会構造の考察に発展することもある。

2 サマーフェスティバルの企画誕生の背景

Keiwa-signの活動はこのようにキャンパス内での学習会が中心である。しかし、それだけにはとどまらない。先述した調査活動や啓発活動のみならず、体験活動も行っている。2018年度、敬和学園大学国際文化学科の長坂康代准教授が担当するゼミと共同で、「ドラッグ・クィーンになる日」を実施した。この体験活動が、のちにサマーフェスティバルの企画に繋がることとなった。

ドラッグとは、異性装を意味する。またドラッグ・クィーンとは、派手な衣装や化粧で女性性を強調したパフォーマンスを行う人を意味する²⁾。ドラッグの目的はさまざまだが、差別から一時的にでも解放されて、自らの表現のあり方を自分自身できめる事のできる唯一の手段ともみなされる。派手な衣装や化粧は、社会から押し付けられるルールや生き方を強調する。強調することにより押し付けられるルールや生き方を、笑い飛ばしたり、それらを跳ね返す力をもつものとも言える。

また、ドラッグはマイノリティを社会の中に可視化する。伝統的な性別カテゴリーや異性愛主義によって生きる大多数の人たちを驚かせる。二つに分かれる性別という制度に対して、強烈な形で、「異なるあり方」を具体的に提示する。ドラッグは、社会の中のマイノリティに見える存在にする手段でもある。

メンバーは、思い思いに「ドラッグ・クィーン」となって、キャンパス内でパフォーマンスを行った。ドラッグの体験は、メンバーに、日頃かれらがそれに則って生きる「あるべき」に、疑問を抱かせることになった。また、自分自身を自由に表現することによって解放を感じたり、自由を感じたりしたようでもあった。

こうした体験をキャンパス内に留めておくのではなく、キャンパス外に持ち出そうというのが、サマーフェスティバルの基本的な考え方であった。新発田市民のみなさんに、知ってもらいたい、体験してもらいたいという考えから、サマーフェスティバルの企画をした。

3 サマーフェスティバルの企画と準備

ドラッグというアイデアをキャンパス外に持ち出し、新発田市の市民の皆さんに体験してもらいたいという考えから、企画を出発させた。ただし、ドラッグを体験したメンバーは、派手な衣装を着たり派手な化粧をするのに、時間や労力がかかることも知っていた。そのため、ドラッグを部分的に体験してもらうという考えから、ネイル体験ブースを出店することになった。

ネイル体験は、学生二人が主に準備を担当した(図1)。ネイルの材料の買い出しから、ネイルのデザイン、そして製作を行



図1 ネイル体験用のネイルの準備

なった。子どもの体験希望が見込まれたため、小さな爪用のものも数セット用意した。サマーフェスティバル当日には、ネイルをつけることだけに集中できるように、それまでにできる準備を全てこの二人が行なった。100円ショップで材料を仕入れ、手芸用の材料なども転用して、工夫を凝らしたオリジナルデザインのネイルを準備することができた。

また、マイノリティの可視化という観点から、メンバー自身がドラッグ・クィーンとなってサマーフェスティバルの通りを練り歩くことも企画した。メンバー6名がドラッグ・クィーンとして参加することとなった。当日の化粧や衣装の着用在スムーズに行えるよう、リハーサルも事前に行った。サマーフェスティバルであることから、浴衣を工夫して着るメンバーもいた。また、練り歩きの際に持ち歩くプラカードも準備した。プラカードには「あなたの隣にもいる—サイン長める世界」などのメッセージを書いた(図2)。それらは、Keiwa-signメンバーたちが新発田市民の皆さんに伝えたいことを自分自身で考えた。

「練り歩き」すなわち「パレード」は、セクシュアル・マイノリティの権利運動の中でも大きな位置付けと意味を持つ³⁾。「パレード」というにはあまりにも細やかなものであったので、「練り歩き」と呼びたい。セクシュアル・マイノリティの権利運動としてのパレードが実施されていない新潟県そして新発田市において、「練り歩き」は、マイノリティを可視化するKeiwa-signによるささやかなマイノリティの可視化運動の試みでもあった。



図2 メッセージを書いたプラカード

4 サマーフェスティバル当日の様子

Keiwa-sign ブースのテントの中には、「LGBTとは」や「Ally(支援者)になろう」といった内容を説明するパネルを置くテーブルと、ネイル体験のテーブルとを設置した。

パネルを置いたテーブルは、訪問者に対して、Keiwa-signの活動を紹介したり、「LGBT」や「Ally」という言葉をパネルを使って説明



図3 啓発活動用のパネル

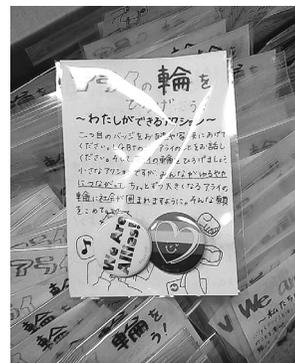


図4 「輪を広げる」缶バッジ

し、啓発活動を行うことを目指した(図3)。また、Keiwa-signが作成した啓発用の缶バッジを販売した(図4)。缶バッジには、これを購入した人が支援の輪を広げられる工夫が

施されている。袋には、バッジが二つ入っており、「Ally（支援者）の輪を広げよう」と題した小さなリーフレットを同封している。購入者は、バッジのうち一つを、知り合いや家族に渡すことができるようになっている。具体的な行動を通して「輪を広げる」ことにつながるという考えをもとに製作した。

ネイル体験ができるテーブルの方では、準備したネイルのセットを展示し、ネイル体験の看板を掲げた（図5）。ネイルをつけるための道具を広げ、小さな照明をつけて、担当者の3人が待機した。最初は、ブースの前で立ち止まる人が少なかったものの、次第に小さい子どもたちとその保護者たちが列を作るようになった（図6）。担当者3名が休憩する時間を十分に取れないほど、子どもたちが並んでネイル体験を待っていた。

先述のようにネイル製作を担当した学生たちは、子どもたちの手の大きさに合う小さなネイルも数セット用意していた。ネイル体験を希望する子どもたちは、用意したネイルの数を大きく上回った。大人用のネイルを削って子どもたちの手の大きさに合わせる作業も行なった。片手5本の指にネイルをつけていくのに大体30分かかった。並んでいる子どもたちとその保護者たちを待たせてしまうことになったが、辛抱強く待ってくださった。整理券を配るなどの工夫があると良かった。

手元が暗くなっていく中、限られた道具を使って、担当したメンバーはネイルをつける作業に一生懸命に従事した。子どもたちの希望を聞きながら、丁寧にネイルを削り、手際良く、ネイルをつけていった。子どもたちとのやりとりは、最初はぎこちないものであった。経験を重ねるごとに、子どもたちへの声がけも次第にスムーズなものになっていった。つけ終わった子どもたちの喜ぶ姿が印象的であった。そんな様子を見て保護者たちも喜んでいた。「来年もぜひ出してください」という声もいただいた。

「練り歩き」については、ドラッグ・クィーンとなった6名が列をなして、会場の端から端を歩いた。メッセージを書いたプラカードを持って、「LGBTQの人権は、基本的人権です」と声を上げながら歩いた。混雑の中、人々の間を縫いながら、練り歩くのは大変だった。6名のドラッグ・クィーンが連なってサマーフェスティバルの会場を二往復することができた。



図5 ネイル体験の看板



図6 ネイル体験の様子

5 若干の考察

ドラッグを市民の皆さんに体験してもらうことをネイル体験はねらいとしたが、そのねらいの達成は部分的なものにとどまった。かわいいネイルをつけてみたいという気持ちをもつ小さな子どもたちのネイル体験が最も多かった。提供側が、ドラッグの経験という点を明確に広報しなかったことに原因がある。サマーフェスティバルでの出店とは、販売行為に従事することである。消費者の関心に合わなければ、売ることはできない。「かわいいネイルを子どもたちが体験」の方が、消費者にアピールできる。そのため、ねらいを達成することには至らなかった。

ただ、中には、ネイル体験をした男性もあった。これは、まさにドラッグの体験である。また、普段家事の支障になるという理由でネイルなどできない女性が、「ネイルつけたら、家事しないから。パパにやってもらうからね」と言いながら、嬉しそうにネイルをつけていたのも印象的であった。はからずも、私たちに、それぞれのジェンダーに求められる役割や、主婦と呼ばれる人たちが何を我慢させられているのかを考えさせる出来事となった。

ネイル体験を待っている保護者に、Keiwa-signの活動の紹介やパネルを使った説明も行った。中には、バッジを買ってくださる方もあった。当事者だとおっしゃる方もいらしてくださり、Keiwa-signの活動を応援してくださった。ねらいとしては主要なものではなかったものの、啓発活動や支援の輪の拡大を行えたことは評価したい。

練り歩きの最中、市民の皆さんから、否定的なことを言われるかもしれないという恐れも持っていたが、そのようなことはなかった。中には、「すごく大事なことですな」と声をかけてくださる市民の方もあり、メンバーたちも勇気づけられた。練り歩きを見てくださる方たちが多くあった。伝統的な性の考え方とは異なる考えや生き方をしている人々が、同じコミュニティにいることを示すことができた。

おわりに

Keiwa-signのサマーフェスティバルへの参加は、収益という観点から言えば、大成功だったとは言えない。しかし、「違うあり方を可視化する」というねらいの実現はできた。ネイル体験をした子どもたち、その子どもたちを連れた保護者の方々、また練り歩きに目を止めてくれた方々、誰も、Keiwa-signの活動に対して否定的反応を示すことがなかった。多様なあり方や生き方をする人々が共に集い、地域の中で一緒に生きることを始める第一歩となった。

Keiwa-signのサマーフェスティバルへの参加は、実行委員の方々にとっても英断ではなかったかと考えている。LGBTという言葉が日常の中でよく聞くようになったとはいえないものの、社会はマイノリティに対して決して寛容とは言えない。そのような現状の中で、

Keiwa-sign の企画を受け入れてくださったことを大変ありがたく感じている。この場を借りて、「しばたサマーフェスティバル 2019」実行委員会のみなさまに感謝申し上げたい。

註

- 1) Keiwa-sign の設立の経緯や、これまでの活動については、以下を参照のこと。LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign 『敬和学園大学 LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign 研究活動報告書 2016 年度』；虎岩朋加他「LGBT についての学生の理解とその課題—敬和学園大学 LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign による学生意識調査—から—」『人文社会科学研究所年報』no. 15、2017 年、131-146 頁；虎岩朋加、Steltzer, Andrew, 池田しのぶ「敬和学園大学 LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign の活動の教育的意義 —2017 年度研究活動より—」『人文社会科学研究所年報』no. 17、2019 年、18-37 頁。
- 2) 以下の文献を参考にして、これらの定義と説明を書いた。Stryker, Susan, *Transgender History*, Seal Press, 2008, pp. 22-23, p. 56.
- 3) 1969 年 6 月 28 日、性的マイノリティの権利闘争の歴史上最も有名な出来事が起こった。ストーンウォール・インでの暴動である。その一年後の 1970 年、この暴動を記念した行進が行われ、以来 6 月には「ゲイプライド」のパレードが世界中で開催されるようになった。